27AB-am003

アルコール依存症患者のくすりに対する意識調査

○小今井 恵里[1], 大畠 康嵩[1], 平本 晃子[2], 堀内 ともえ[2], 内田 晴美[2], 小野 浩重[1], 加地 弘明[1]（[1]就実大薬, [2]林道倫精神科神経科病院薬）

【目的】アルコール依存症は、自らの意思で飲酒行動のコントロールができなくなり、結果的に飲酒行為を繰り返す精神疾患である。アルコール依存症患者は全国で、その予備軍を含めて 200 万人以上存在すると推定されているが、未治療率が高く、治療しても再発する確率が高いため、治療推進及び再発予防には医療従事者による患者への積極的な関与が重要である。岡山県に位置する林道倫精神家神経科病院は、全国でも数少ないアルコール専門病棟を配置し、アルコール依存症回復プログラム（ARP）を実施している。この ARP の一環として、薬剤師を講師とした勉強会が組み込まれている。そこで今回、アルコール依存症患者への服薬支援を目的に、ARP 参加者に対してアンケート調査を行い、患者の服薬状況を明らかにするとともに、薬剤師が果たすべき役割について考察したので報告する。

【方法】2015 年 10 月における ARP 参加者 37 名にアンケート調査を行い、31 名から回答を得た（回収率 83.8%）。アンケートは薬剤師による講義（「アルコールの作用について」）の前に配布し、講義後記入していただいた。

【結果・考察】回答者の 93%が男性であり、年齢は 50 代、60 代で全体の 67%を占めた。ほとんどの患者は何らかの薬を服用していたが、薬に対する疑問や不安を持っている患者は 29%にとどまった。また、薬をアルコール飲料で服用したことがあるかという設問では、74%の患者が「ある」と回答した。これらの結果から、アルコール依存患者は漫然と薬と服用している傾向にあることがわかった。また、薬剤師による薬の説明がわかりやすいと答えた患者が多いにもかかわらず、薬に関してまず最初に相談する相手として、医師または家族を挙げる傾向にあり、薬剤師がもっと積極的に関わる必要性が感じられた。